



目録

加代	加代	加代	加代	加代	加代
女中	女中	女中	女中	女中	女中
十種	十種	十種	十種	十種	十種
蝶花	蝶花	蝶花	蝶花	蝶花	蝶花
中村	中村	中村	中村	中村	中村
双六	双六	双六	双六	双六	双六
八人	八人	八人	八人	八人	八人
女名	女名	女名	女名	女名	女名
不	不	不	不	不	不

女要百八言







色紙短冊渡り中

和歌の
浦
かき
かき
かき

堅六寸四ア
横六寸六ア
小色紙
横四寸二ア

色紙のよき歌のよきとていふも強ち
よきとていふもかき一古歌よき
よきとていふもかき一又よき
字のよきなり

山家松

いふとていふもかき一又よき
よきとていふもかき一又よき

よきとていふもかき一又よき

但し下の白からと上の白とかなへ下
一字あけさるる名をよきとていふ
歌の一字歌より二字歌まで一は
四字歌より

早春 菅 雲術
美州 戸吉友 小色紙

かき

古歌乃ち

よきとていふもかき一又よき

古歌の下の白の上の白より一字あけ
下のかきとていふ

寸法 古歌へ一尺計す 中計す
今一尺計す 中一尺九ア



懐紙のさかすか

春日詠茶送智和歌

中絶屋茶送歌

本はりのよはら〜こ
く〜と〜い〜い〜い〜い
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

大いよ

い〜く〜せのの
ま〜ま〜ま〜ま〜ま
ま〜ま〜ま〜ま〜ま
あ〜ま〜の〜ま〜ま

江戸の月日詠の
歌とて〜九十九と
と文の歌や北のま
まの〜り〜り〜り
か〜り〜り〜り
女の懐角のさかすか
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら



笠詠草并詠茶さ〜

あ〜た〜た〜た
ま〜た〜た〜た
の〜り〜り〜り

来月

--	--	--	--	--	--

あ〜ら〜ら〜ら
あ〜ら〜ら〜ら
あ〜ら〜ら〜ら
あ〜ら〜ら〜ら

詠草

つ〜ら〜ら〜ら
あ〜ら〜ら〜ら

六秋伝

在東葉平賀

那由たのふもむのけ
つがひとつりりのる

信通

まはりのやうなふん
つらなふとねまわひく

文房

つらふはのふもむのけ
ふふとせとわひいふん

春探

つらふはのふもむのけ
おとつらふとねまわひく

小舟小町

つらふはのふもむのけ
おとつらふとねまわひく

大伴

つらふはのふもむのけ
おとつらふとねまわひく



女官の御号

大皇太后宮

天子の御母

申す

皇太后宮

天子の御母

申す

皇后宮

天子の御母

申す

中宮

天子の御母

申す

皇太后宮

天子の御母

申す



○中宮と福とは

中宮と福とは... (The text continues with vertical columns of characters, describing the roles and relationships of the courtiers depicted in the illustrations.)

女院

天子の御母后の御
後居あつて内院
号ふたせり入

國母

天子の御母と云ふ
官つかあらず

内親王

天子の御姉妹か
皇女よの親王宣
下あせらほと云

女御

天子の御妻に中女
小侍の御女と云

御息所

天皇の御妻と

更衣

林中小侍と云
ういせしと云ふ
と司りの女女

典侍

宮中の儀式と

内侍

典侍の御より
一の女房と白書



○武家階の女院
風小御と云ふ又あり

かまの御下後なり
と云ふもその御女に風
俗あり大抵の御女に

かまの御女に御女に
かまの御女に御女に

かまの御女に御女に
かまの御女に御女に

かまの御女に御女に
かまの御女に御女に

○町風の去々町家の
内室むすめなど云ふ

髪はさくさく髪はさく
むすめはさくさくむすめ

むすめはさくさくむすめ
むすめはさくさくむすめ

むすめはさくさくむすめ
むすめはさくさくむすめ

むすめはさくさくむすめ
むすめはさくさくむすめ

むすめはさくさくむすめ
むすめはさくさくむすめ

女の標となると貞女の守衛も
 り一俗女もまこと中女房とい入
 るまのいりりらわきのゆきふあはは
 天理の南宮とて即ち女のいんこ
 女へていぬくそそのまへんりけの
 男ふまらぬのいんまへ右依も
 貞女あまふまふまふまらつり周く
 ちりりりりりりりりりりりりりり
 男わさくまてん切小思ひりりりり
 りりりりりりりりりりりりりりり
 知んきん小影ひまひりりりりりり
 女のまらりりりりりりりりりりり
 後一あしりりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりりりりり
 義とちりりりりりりりりりりりり



女へ冬氣の心なれたやうなむじり
 かく片一からその神をいりりりりり
 女へいりりりりりりりりりりりり
 さらばいりりりりりりりりりりり
 通して錢ふりりりりりりりりりり
 とおびりりりりりりりりりりりり
 切みりりりりりりりりりりりりり
 いりりりりりりりりりりりりりり
 親らりりりりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりりりりり
 けのりりりりりりりりりりりりり
 りりりりりりりりりりりりりりり



夫ハ陽ウテ介と流シ女ハ流ウテ
 内と流シ年天理シヨテ女と度入
 内成内入カトウカ家の基盤義ハ女
 女ノ心カヨクテカキハハツツハト
 女ノ心カヨクテカキハハツツハト
 然ノカキト流クカキハハツツハト
 けんぞんとして忠ノ心ヲ受けハ
 わんぞんとて忠ノ心ヲ受けハ
 返入してそハ忠ノ心ヲ受けハ
 入ナリカキハハツツハト
 房ノ心カキハハツツハト
 忠トツビ家内カキハハツツハト
 忠トツビ家内カキハハツツハト
 忠トツビ家内カキハハツツハト



婦人の徳ハ親教トシマシク志ハ
 シホあまハ男始ハシホ及テホ
 門ホシマシク徳ハシマシク志ハ
 仁教ノ徳ト人ノ奉命ナリケルカ
 人ノ心カキハハツツハト
 先ノ人も法日カキハハツツハト
 年大切ホシマシク志ハ
 為トナリテハホシマシク志ハ
 然ノカキト流クカキハハツツハト
 外家ノ心カキハハツツハト
 女ノ心カキハハツツハト
 女ノ心カキハハツツハト



人の心通て年より老あする附へんを
 是とてする天乃のゆきゆく神附の
 以泳飲もんお淋の乃ふかさいふの
 行しすとも神のちしんてあり女の
 かろふおしむかの心ありよりて人と
 うやく我子と人のみよりうやく
 せりうふおしむものとおえんれとあふ
 よりなんてんてす年多しるまへ天
 おありして人のけねる福らふ
 まへむさやちなるとあるてうわらわ
 ず娘乃かまの如して天の飛とあり
 未がうらふ子孫とてあふなりとそ
 こそ放詩なまへみる失いてまのや
 小立すあらぬとあへんて思ふ女
 中ふすくを室よりうらふ福らふ

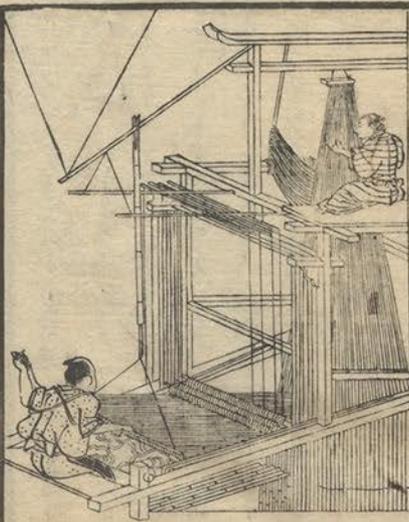


○ 髷の抽神紀お日磨す一人の娘
 わりごを父をくわくくえくゆくと
 りつとれ娘家おまへるさふいへる女と
 か父とわの女とあはと夫婦おかなり
 とれんぶき一馬をのらひあまをう
 しらりと強くその父をまをせゆりうら
 け馬娘お飛かろふ娘父おこの事とあ
 父のつくるて教へばてとふのは娘の
 身とあておひよ素のあかろあせむと云



美子
 まく
 回

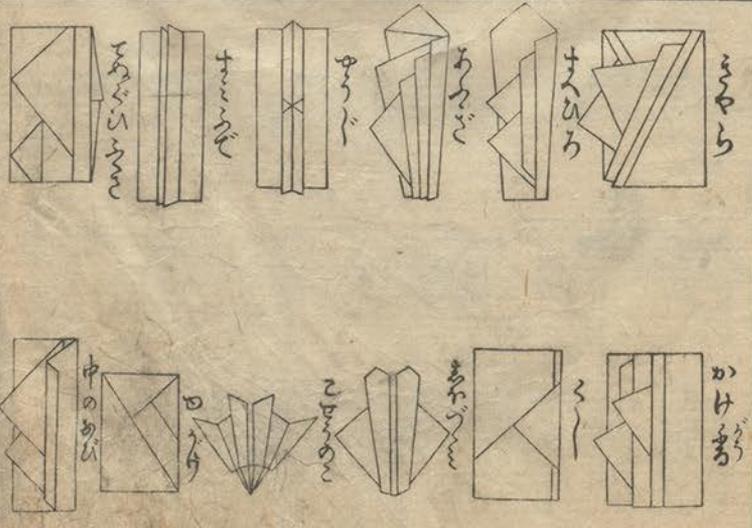
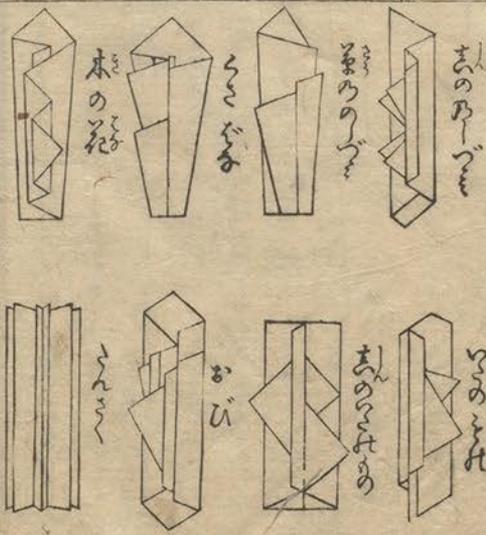
○ 摺りのうへへは天帝の后とてめて織神
 台のそへは比咩の二代の子孫の御孫
 子の心后とてめく横と織出の心して
 あり女の心とてなまのり人代かゝるそ
 魚津天皇の心とて百濟國よりまを津と
 つつとめつてり又そのつら異國より又嫁か
 娘異羽佐羽の心とてあつてりそ



○ 蝶花紙の由来

池子のやふ花とてけり半の天と
 ままの國親者りかゝる主婦の
 そのあつて毎日供とてそ又父母
 のと半とて天ののりふ竹の林
 ふまひのふのふかふか一つひ茶
 つつひは供とて入る竹のよの中ふ
 屋ひあはふかちあつて和合とて
 おのつて酒とてかゝるそ人これと
 ちまひのふらとてあまのこの際
 とびまひのけ竹舞とてあまの
 人まひのふらとてあまのこの際
 際とてあまのふらとてあまの

小笠原流折紙
 蝶男
 蝶女



目録 めいりく

て	うら	くさ	さ	い	ろ
さ	ひ	け	い	ろ	さ
ま	り	ま	り	ま	り
こ	と	こ	と	こ	と

目録
さひけい
まりま
こと

目録
さひけい
まりま
こと

白香 しろかぐ

白香
さひけい
まりま
こと

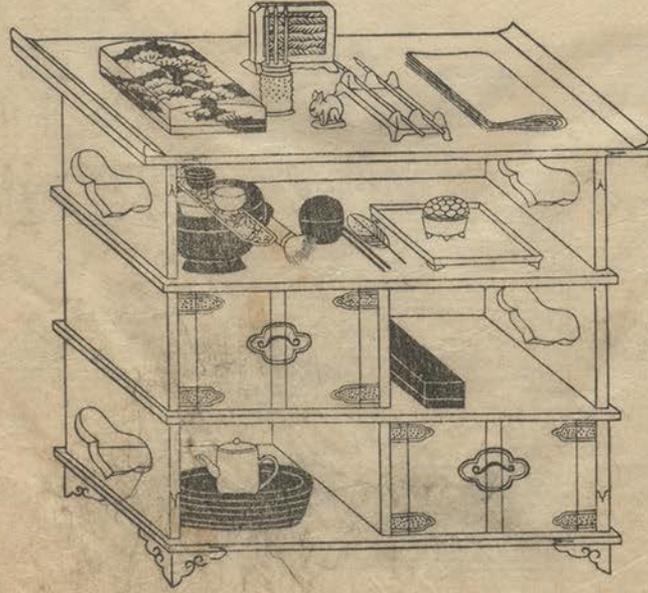
白香
さひけい
まりま
こと

白香
さひけい
まりま
こと

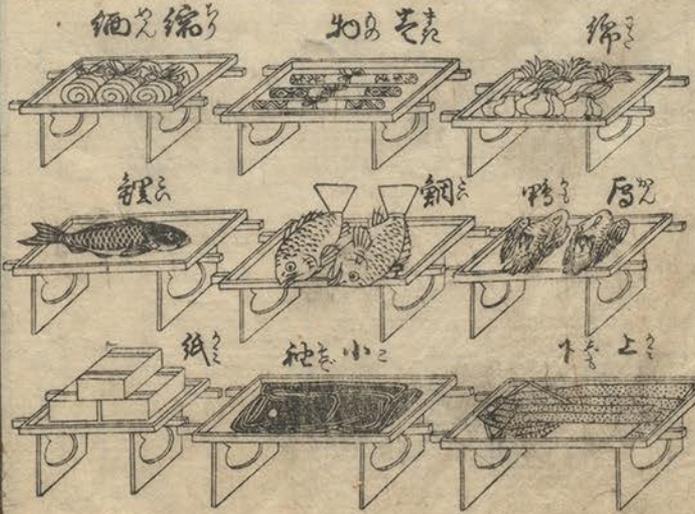
沖厨子棚傍法 おうちまなこ ぼうほう

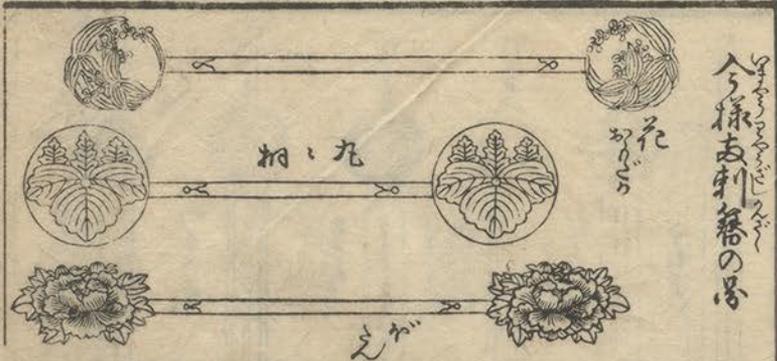
外 と 棚 たな
 檜 ひのき 眉 まゆ 羽 はね 香盤 かばん
 二 ふた 棚 たな
 廊内 ろうない
 廊外 ろうがい
 小角赤 せうかくあか

沖厨子の図 おうちまなこ の ず



つもの つもの

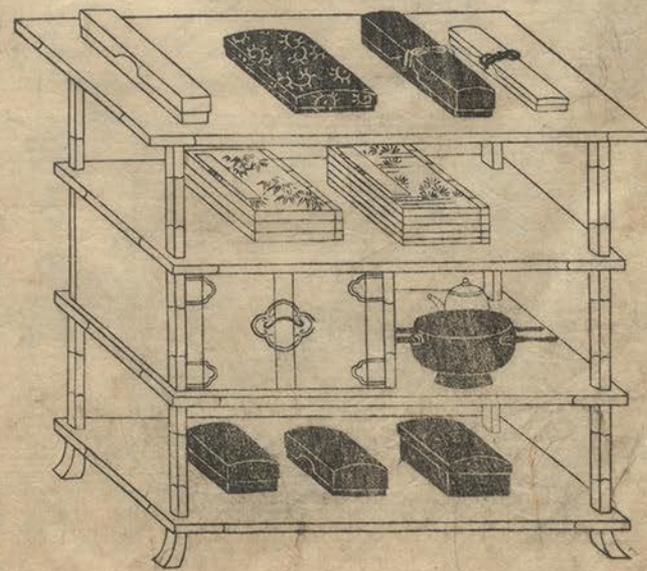




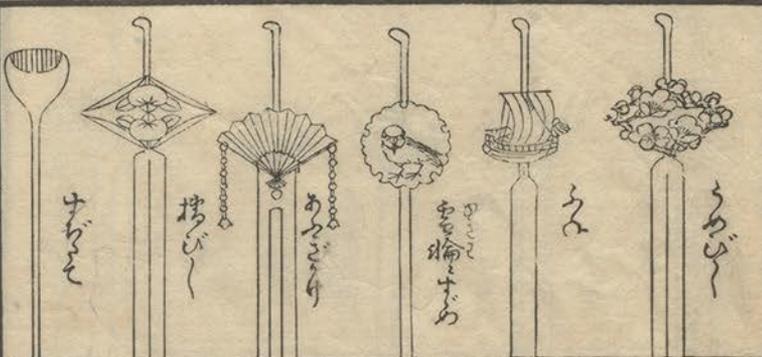
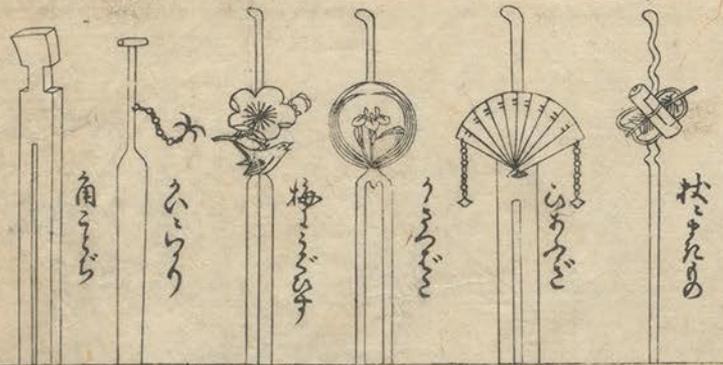
今様支利卷の巻



黒棚の法
 文箱
 御箱
 長文箱
 針箱
 古今集
 萬葉集
 二ノ棚
 廊の月
 さり敷
 口ノ棚
 敷箱
 御箱
 中ノ棚
 黒棚
 寸法
 横
 尺



黒棚の図

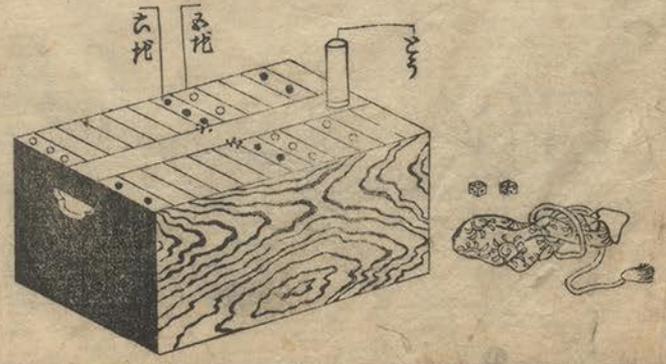


欵かゝりの事
 腰板のくどいものごと
 うい糸で五束業平
 伊勢へくゞりうら
 とくく香文の女御れ
 ね明の夜つと云々
 欵のよむとておれん
 そま平下のおとこさ
 うい糸でくゞりうら
 とくく香文の女御れ
 ね明の夜つと云々
 欵のよむとておれん
 そま平下のおとこさ



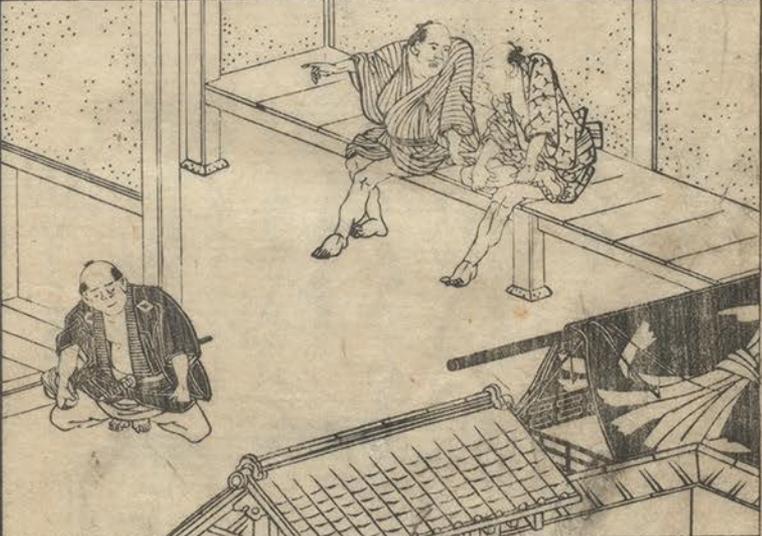
〇貝のわいひい
 そま平下のおとこさ
 うい糸でくゞりうら
 とくく香文の女御れ
 ね明の夜つと云々
 欵のよむとておれん
 そま平下のおとこさ

雙六の事
 陳思王書子建の
 御り物
 唐土のり
 唐の明を
 こまどり
 楊子地
 そのらり
 つらね
 女の事
 ナガそ



婚儀の江戸

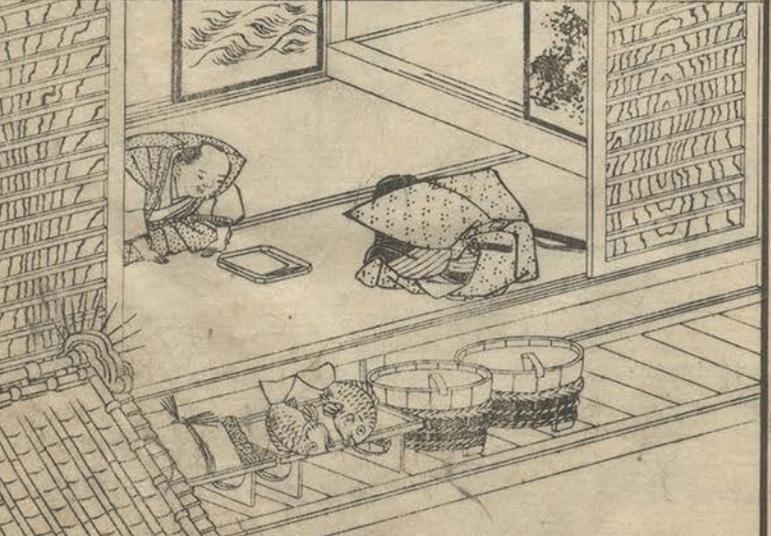
嫁入り来て知れそく
 らのい吉日と定め儀納
 とはらすべし上替の七老
 七種申せさ下入又為又
 程またの二三三様さへ
 をまつのり合せふさふひ
 さあけありはれさよあり
 ものふささひ仲人のあう
 きあふべしとて婚期の日候
 さうすつてあ夜あひへい
 あ夜ふそねかろふべし老
 相見縁小袖入目縁仲人
 なくふらうりの父母へ
 さふべしとの夜そねか



大和河

かこもよと いかりり
 かだあてと おくさぬ
 がゆあてと つつりり
 ひすあてと ひみりり
 まうとと そりりり
 こへゆと あろいど
 こもゆと おもひひ
 人のゆと おこまら
 人のゆと あがり
 かりとと びりりり
 かりとと ぶど
 あまゆと ああえん
 ひまゆと ひまど
 かみゆと かのど
 こめゆと るんご
 りまゆと まあ
 りまゆと まうご

きよぶとのふ両合ふて夜
 義と出まへ仲人へ答を
 初ふあふべしと仲人へ
 夜の夜義と物ふんすね
 のりり入る
 婚儀の夜が娘の髪をか又
 母とも休日とせ仲人へ
 んじとて身嫁のさるほさ有
 べし先嫁さあんのをせ
 ますりりりけささるの
 中のうりけささるの
 ふさすさあゆけくおの
 のさるけささるの
 さすきさあんのをてえの
 けささるの嫁入りさあゆ



おしゆと かりん
 ぢごりと かにぎ
 あんこと あいひ
 だんごと いしん
 まめとと ささこ
 けんとと おひひり
 あつくと おひひ
 あーと おひひ
 のりゆと おこい
 こさとと めす
 こさとと こさつ
 かいと おまっ
 かいと かい
 かやと かい
 小徳とと 一つ
 一本と 一つ
 一本と 一つ

うらぬかたふてそのふかすを
 とらして入嫁し嫁も娘を
 入へ居しやとて女方の父
 母知り嫁なふつく伴し嫁
 へかしの涙をかかふれぬし
 伴人こづてそまゝいぢま
 しとし先知の父より嫁の
 父へてまゝなりむけひの意
 ありの命あつて一まふ
 ろろく嫁のお親目知る
 じづいへ伴人知居と
 ちつひい知母嫁と娘をふ
 つまひい嫁をこゝろまゝと
 よりのことと嫁をこゝろまゝ
 夫婦じつたまきと伴とあ



夫とてかま
 ちとてあま
 かかてい
 たんとあま
 たいとあま
 ちとてあま
 うとてあま
 ちとてあま
 うとてあま
 ちとてあま
 うとてあま
 ちとてあま
 うとてあま

入嫁し嫁も娘を
 入へ居しやとて女方の父
 母知り嫁なふつく伴し嫁
 へかしの涙をかかふれぬし
 伴人こづてそまゝいぢま
 しとし先知の父より嫁の
 父へてまゝなりむけひの意
 ありの命あつて一まふ
 ろろく嫁のお親目知る
 じづいへ伴人知居と
 ちつひい知母嫁と娘をふ
 つまひい嫁をこゝろまゝと
 よりのことと嫁をこゝろまゝ
 夫婦じつたまきと伴とあ



夫とてかま
 ちとてあま
 かかてい
 たんとあま
 たいとあま
 ちとてあま
 うとてあま
 ちとてあま
 うとてあま
 ちとてあま
 うとてあま
 ちとてあま

賢女鑑

○夜通姫

人皇二十代のみこと元祿
天皇の妃なりすまを容
教養素ふまじりくむの
やとゆふす衣のそよふ
すたしつらなるも衣通姫
と称し甘うなりむ大
賢徳とそまなす小初ら
細考三杯の立玉津若
大明神と崇まそまつる
御神徳
たらふりまじも
けふふはん



持統天皇

春とに
髪

ふふ

白

衣乃

あま

の

山

梯平入磨

足

はり

尾

ふ

た

ち

の



○光明皇后

光明皇后も昔々人
 皇中又代の兄を御
 天皇の御所にて奉
 女争れ内徳云々
 乃の容色と御備へ
 つゆは光明赫奕
 えより併行と云く
 ましりく帝不
 小多々逸形佛と
 法皇御と云く



け皇者のしりな
 中のかのち
 履しけ皇者の
 如く論教書
 たり

山崎赤人



田子此浦り
 白の
 書を
 たり

猿丸太史



虎の
 鹿
 志
 林
 たり

○白痴加智

かりこ
 加智子と申すは、
 又十二代の帝、
 乃の内病なり、
 まるた内能書とて、
 けまきけき、
 まとをかひいたまひ、
 むまじく内能書のなれ、
 をとりたまひし、
 女の事、
 り、
 まり、
 信、
 ろをひい、

中納言伴持

鶴の
 おく
 おく
 志ら
 和
 小あふらり



アふ極林と申すは、
 あり、
 白痴と申すは、
 の、
 の、
 の、
 と海、



安清仲磨

まは
 あり
 喜
 み
 の
 の
 の





陸より小舟をいひ又よく
 舟を焼くとして民安令より
 う〜〜と舟とかり〜〜と
 やア〜〜と〜〜と天也と
 も〜〜と〜〜と鬼神も数
 せ〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
 ぞ〜

○雪小町
 三月三日早敷して二月
 のころあつた〜〜とふた
 万民はささひか〜〜と
 くらけ〜〜と〜〜と小舟
 小町小舟とよ〜〜とあ
 いのま〜と勅定り〜〜と
 小町か〜と〜と神宗苑
 の池乃〜と〜と〜と
 あ〜と〜と月本〜と
 ても〜と〜と〜と〜と
 あ〜と〜と〜と
 と〜と〜と〜と〜と
 三月三日夜降つ〜と〜と

小野小町
 花の色は
 うらりり
 くらか
 つばき
 おも
 あら
 ながめ
 まふ

我庵法師
 志の
 まつ
 ぞ
 心
 人をもつま

○ 清少納言

法女の肥後も又彌子女
 之彌子法系姓なりと
 法女細々と一人一系院
 の台座ははくく女君
 その生備はらやふして
 方々の世ふあえりあり
 年のや雲のつと
 まるあゝ帝坐を
 御ましく香炉峯の
 へいりて解卿小作
 その心気とて
 人もかうふ法女
 かなふ坊のじつと



蟬丸

少後やの

ひも

くは

あまの

あまの

森議堂

和田の

い十時

人ま

あまの

あまの



我子しくなりとて
 白乐天が侍小
 撫養看とあつと
 けいひとを
 とんんの人
 がりーと

○道徳公お母

右大納言御公の御母と
 は奥院長家公の御中
 目下御公の御中と
 障子能く御と掩ふかの御
 うことひまき系竹の
 屋は長いせまひ心奇
 の衣通姫の御まごまを
 たまひ心奇にあつたゆゑ
 長きまごまもひまご
 らうもあつたを御らす
 ところなり
 御まごまの御まごまの
 御まごまの御まごま



の御まごまの御まごま
 け御まごまの御まごま
 山を御まごまの御まごま
 の御まごまの御まごま
 まごまの御まごまの御まごま
 つまごまの御まごまの御まごま

僧心遍照



まごまの御まごま
 吹ひら
 をまごま
 まごまの御まごま
 まごまの御まごま

陽成院



はくまごまの
 まごまの御まごま
 の御まごまの御まごま
 つまごまの御まごまの御まごま
 御まごまの御まごま

○辨内侍

弁内侍が父の志系ちま
 志系信実といひて
 後堀河院後深草院の
 おゆふはくへ官女か
 け女房才智くまひま
 初秋と又やまれど
 ろへあつときば
 賢姫の降ふれ給て
 唐衣けりかか賢
 あまの我れまか
 忠臣孝子のなき
 へ有すけまこと
 撰み写しの代
 け



まの帝教あつて位
 うつとらふも
 お坂本かかん
 糸山多七の歌
 林
 七つ

河原左大臣



なれはくろ
 志のぶら
 ずり
 誰
 ゆえり
 ら
 我
 な

光孝天皇



あつてあ
 妻
 かく
 くれ
 け
 け
 け
 け

伏見加賀

加賀の^{とものりん}羽院の^{まはたの}お辰侍
見^{けん}門^{もん}院^{いん}お住^{すま}み^み
女^{によ}番^{ばん}かり^{かり}の^のふ^ふく^くま^まの^の奇^き
人^{ひと}かり^{かり}の^のふ^ふく^くま^まの^の奇^き
の^の歌^{うた}と^とま^まの^のふ^ふく^くま^ま
も^も秀^{ひで}盛^{もり}なり^{なり}と^とお^おの^のひ^ひあ^あ
お^おけ^け歌^{うた}と^とま^まの^のふ^ふく^くま^ま
と^とお^おの^のひ^ひあ^あの^のふ^ふく^くま^ま
花^{はな}を^をた^たた^た有^{あり}仁^{にん}か^か賀^が
ふ^ふん^んと^とけ^けの^のふ^ふく^くま^ま
こ^この^のけ^けの^のふ^ふく^くま^ま
お^おの^のひ^ひあ^あの^のふ^ふく^くま^ま
お^おの^のひ^ひあ^あの^のふ^ふく^くま^ま

ひなまつりよもとの歌
おのひあ

おのひあ
おのひあ
おのひあ
おのひあ
おのひあ
おのひあ



中納言の平

まがら

いまだ

この巻

おの巻

おの巻

おの巻

おの巻

おの巻

在原業平

おの巻

おの巻

おの巻

おの巻

おの巻

おの巻

おの巻

おの巻





とついでにまじりていふ
業州如來わらむたまひ
白く細くふけけりやと
えんくまはらめくまより
次舟ふらむまの身とふ
とまのとなり

○侍宵の侍悦
こたよの
小侍悦の言合枕の宿女
うきたひなれば悦めそ
まふお説の宿まじりて
うきふらひりりり
うきむらびあつゝこの
とりりのうき
けさみりたり侍宵の悦
細くまじり女なりきまじり
まじりてわらむりりりまじり
あはれとあまのまじり
うきやうとまじり
まふ業州あまじり
このあふらひりりり

元良親王
俊ゆき
あま
なふと
あま
あま
あま
あま



素性法師
いま
とみ
なづ
ばら
なる
あ
月
月
あ
あ
あ
あ
あ





天満宮の御徳は

夫天満宮の御徳は
 小やもかこほまで徳種
 すぐさましつとくその出妻
 御後ふむいふごとく御
 婦人の崇信しものごとく
 此神かまかふ御徳とてひ
 人よりまゝ美のんごりて信ん
 りつゝ御徳とのたまひその
 為幸いとゆゑのたまひ
 なりあふは神のたまひ
 初めあり秘する事かま
 とも信人のまゝとてあま
 すものごとくおのりつゝ



文康康秀

吹く風
 草葉の
 志は
 うぶ山
 何を
 何れん



大江千里

月をま
 此れ
 うそ
 我が
 秋もあはれ

○ 辨別の区別

よしのきりかき
すゝめしん
つらあけの月

ひびきと一月ふんづ
石目があひこ

つらうたね
甘んばるまを

○ 天祥の十号

好去る良
通去 廣去 去去 去去

○ 天祥の十号
深大政威徳天満齋在天神

くろまのなま

菅家

けをびハ

あとり

あどり

もむ山

おまろ

おまろ

神のまふく



三條右大臣

おふく

おふく

おふく

おふく

おふく

おふく

おふく





大和郡長守の居

中納言 藤原 実朝
 みあつて
 なるがら
 つま
 河
 川
 とてあ
 り
 なる

次
 根牟乎明
 今迄元凶非進
 死
 今迄のひるき
 天のひるき
 皆人のひるき
 そのまはるき
 南史実乃授親安樂河

小倉山 負信公
 おの
 んあ
 清幸
 まさたか

○ 中将姫一代記

柞中将姫の中儀と云ひ
 甘う小れ父の大織冠法皇
 公の孫第一位武智麻呂の
 子後一位大臣藤原朝
 臣を其云と申す人々に
 十六代尊皇天皇より孝徳
 称徳の二帝小法甘うお漢
 の才小達よと致し氏と
 辨しよふふ田名法んや
 まいそひりり母と侍候
 葉菜のおとや甘のくりり
 又中れおるなりと云ふ
 と世の中の変化と退治し

うふふり帝は其のあま
 ら守心養英とて世の主人
 と申す人々うりうり
 まま甘う其のわい
 理のまのけしうり
 ちうり小末東と申す
 ちうり人といふ一人も



源宗平朝臣

山里の冬ごり
 まさ
 人先も
 おの
 おの



尾河内行徳

初
 お
 ま
 ち



まはす明ききとて後さ
 あらうららつとれたはまのおし
 ちかましくももたわら
 知れまふまきで 記香もふ
 ねむきなりまふふ二七り居ま
 るははまのまふまき白ま
 ままけ
 ままきでまふらりまをえん
 るまより後後一ひ月満
 うまのときき難きと流り
 け夜 帝の四身おまき後
 貴安かてを後おまか室
 一女子とまらうまき宮まけ
 ままとまき一金色のいろと
 まらうらまのままらとま
 てまらまらまら帝うまきま

とぶのまき
 壬生まき
 ありらけ
 有明
 はまき
 へ
 まき
 ありらけ
 あらうら
 うらまら
 うらまら
 うらまら



ひとあし 帝をまき 勅
 ひとあし 帝をまきの時刻ふ一
 女子とまらうまきとまらうま
 帝おまきまらうまらうまら
 肉竹とまらうまらうまら
 ねとらまらうまらうまら
 れ監とらうまらうまら



さらのまの
 坂と毛則
 あらうら
 朝はま
 ありまら
 まらうま
 まらうま
 うらまら
 うらまら
 うらまら





娘もさかになりさきふん
 あつて夜七八才がなりなり
 けり夜まきりまきりまきり
 の母の影もたけずあひ
 焼うらうらひそふたを
 しきまを奥ふしへ入る
 と傳この水盤こまをてん

乳母となりお盆と傳とて
 山河やかぎりなりうらうら
 なく山河二才の林を赤ん
 白ま婦娘とふくまき
 月どかかたつて娘乳母の
 孫よりりりりゆの方ふち
 さきとわらせ
 若谷も杉木のらういと
 あひして 女人茶件
 今どきあきせん
 と山河あきとどおしりふ
 若と赤ん白ま婦とてりり
 山河ふかづきりりりりり
 まきまきりりりりりり
 あひいとなりりりりりり

紀友則
 久きれ
 ひり
 あい
 春乃日
 志づんは
 花かん
 ちんらん



春道列樹
 山河よ
 志づんは
 海をあらぬ
 志づんは
 志づんは





ねごとらうの
 か 回さしめい甲や
 されらまはまおのんはらま
 ち 替あふと 況し 娘ま
 い 娘まあともかまはまおの
 ねまおのんはらま 娘まま
 れとて 一の分し

あふあやこいそり
 そらわさかうの 娘ま
 い 向まはまおのんはらま
 え 赤まんげな 娘ま
 むい合しつるの 娘ま
 子 娘まやせ 後色の 娘
 よしとまはらま
 つまやめさびあ
 としう入娘まらま
 内 娘のまい
 まくものど 男ま
 ねまやまら
 ままおのんはらま
 ねまはのまい
 かまらまのまらま

ちのの
叔東興風
 誰ととも
 志願人よ
 とま
 馬砂
 松もひの
 友なる
 かり



い
紀貫之
 人を
 あらま
 あらま
 あり
 ねま
 昔まはらま



お宮さまのあつちふかたは
 ふきとんで 龍巻の巻く
 せび 姫の九人あわらるを
 ちうくいあくち切りけき
 かんくく 天年 掃宮さま
 姫の身のとこづこもなく
 白狐一足くくあましくやく
 久しきれ 姫のまふ
 あまく西のふまむまき
 姫佐多とあつせ
 けのつれまふまづる
 とのつふつからまや
 とまあつしん
 冬来ぬまのつうきのおで
 かりの心経といきさるうへ



紺紙金紙の御満海を
 かりのふ 姫のまふまづる
 ちうくいあくち切りけき
 かんくく 天年 掃宮さま
 姫の身のとこづこもなく
 白狐一足くくあましくやく
 久しきれ 姫のまふ
 あまく西のふまむまき
 姫佐多とあつせ
 けのつれまふまづる
 とのつふつからまや
 とまあつしん
 冬来ぬまのつうきのおで
 かりの心経といきさるうへ

清原深吉の
 夏はあ
 まる
 青
 あけつら
 明けのつら
 重なる
 月やどふ
 理森



文屋朝康
 ちうくいあくち切りけき
 かんくく 天年 掃宮さま
 姫の身のとこづこもなく
 白狐一足くくあましくやく
 久しきれ 姫のまふ
 あまく西のふまむまき
 姫佐多とあつせ
 けのつれまふまづる
 とのつふつからまや
 とまあつしん
 冬来ぬまのつうきのおで
 かりの心経といきさるうへ



三年春み露のやど死西母
 母のあかりをたれぬのてん
 地なりうが西定業よやま
 ゆえん後ふさしきり
 うつぶねうかげささうあ
 十日夜ふむは性ささい
 あさ夕まらたどひあひて
 まんおさうのまわうし
 んるく一周もも通つげ
 あふは仏と遠しめ
 の僧とあつちけ
 ゆいしけ夜昨のま
 ぢらう一人ふふま光明と
 ゑらたけまふねつら
 四ねしつらひつらま

四月の母のあつちけ
 うねふいふらかく極
 東のはせしき紅附の
 うあわらわさうと宮さ
 しつらまらつら
 んもさしきし月夜
 唱ふおつらつらその



右進
 早き
 力をば
 思ひ
 ちひ
 ちひ
 命志
 智うね



春議事
 あさぢふれ
 志れ
 思ふ
 あまらうと
 人ふらの美





のらふ氣公（たけなほ）花（はな）はなはつ（はつ）の心
 貞女（まこと）照子のあはれをしのぐ
 ほ妻とて入（いれ）作（しよ）はらまの母
 せりけりあはれおかし
 なるあつは入照ま
 平徳宮六年（へいとくみや）すいひのち
 肉裡（にくぢり）小（こ）権（ごん）花（はな）のさきわけ
 うい女（によ）市（いち）の四年（よんねん）かまひこ
 る九（く）の（の）中（ちゆう）あつはつ（はつ）作（しよ）
 ちとあつはつ入照まお中（ちゆう）作（しよ）
 娘（むすめ）も（も）あつはつ入照まお中（ちゆう）作（しよ）
 出（い）所（しよ）手（て）く（く）お照まお中（ちゆう）作（しよ）
 すい照まお中（ちゆう）作（しよ）の叔中（しゆくちゆう）お
 作（しよ）入照まお中（ちゆう）作（しよ）の（の）心（こころ）

のらふ氣公花はなはつ
 貞女照子のあはれをしのぐ
 ほ妻とて入作はらまの母
 せりけりあはれおかし
 なるあつは入照ま
 平徳宮六年すいひのち
 肉裡小権花のさきわけ
 うい女市の四年かまひこ
 る九の中あつはつ作
 ちとあつはつ入照まお中作
 娘もあつはつ入照まお中作
 出所手くお照まお中作
 すい照まお中の叔中お
 作入照まお中の心

壬生忠見
 忠見を
 家にお
 するに
 人志す
 おいひろや

平徳威
 忠見を
 家にお
 するに
 人志す
 おいひろや



おまふ丸にふかき世のふ
 ぢた思ひのむすむす女とて
 ぞい酒とてのへ舞ひのうら
 へてとてなへでまひき
 夢丸とてのふとつらね
 くすむつふつわつらや
 あつらん心あつてくまあつ

けつとていふもねけ中
 形の如きながう麻言は
 く深すましくつひまを
 け並のるんううく
 ろいりり思ひのあひ
 しまふましくんのか
 へてとてえうあつ
 てとてううねとて
 かしらうへ今とて秋の
 お思ひのあつらふま
 ろうへおまふ丸とて
 花わくしういふ
 まうへおまふ丸とて
 かりんとあつらふま

権中納言教忠
 意くれ
 後の心よ
 けき
 ひ
 おい

清原元暁
 契つら
 神
 志
 志松
 浪

とおとよぶたうらふはあはれ
 一もあはれのせむし〜
 ちかひ入〜そのま〜
 とうりり思ひい〜
 らん担ぬの〜
 さあ〜かたが子〜
 あつりのあつ〜
 ち〜
 とか〜
 い奴も〜
 のか〜
 の指〜
 り〜
 ち〜
 来〜

中納言忠
 あふよあ
 な
 中
 人
 うみ
 うま

かん〜
 の〜
 も〜
 ち〜
 ち〜
 ち〜
 ち〜
 来〜



漁漁云
 知
 子
 人
 お
 の
 の
 ぬ



中よりの娘さふあつた
 ともなひのまゝにさうさう
 の関係なりとてのまゝに
 此後何せんとの御機嫌
 御女御と仰つたの御機嫌
 御機嫌のまゝに御機嫌
 んとせんや一合さ

此の御機嫌さういふ御機嫌
 此の御機嫌さういふ御機嫌
 んとせんや一合さ
 中よりの娘さういふ御機嫌
 よつと娘の御機嫌さういふ御機嫌
 御機嫌と仰つたの御機嫌
 んとせんや一合さ
 おもひの御機嫌さういふ御機嫌
 御機嫌さういふ御機嫌
 つつと娘の御機嫌さういふ御機嫌
 んとせんや一合さ

惠慶法師
 志をたつ
 人のいふ
 妹をききに
 たり

 An illustration of a Buddhist monk, identified as Enkyō, seated in a meditative posture. He is wearing traditional robes and has a shaved head. The background features stylized floral patterns at the bottom.

曾孫好忠
 舟人
 うらな
 り清と
 恋乃たつ

 An illustration of a nobleman, identified as Sōjū Kōchū, seated in a meditative posture. He is wearing ornate, patterned robes and a cap. The background features stylized floral patterns at the bottom.

こそおとすに... 娘を仰け
 まわしつつかののぞと貴
 そこのお仲と血争は免
 らざらばりて懸るこそ相
 おのまひの娘と音言はまは
 後娘のやごころかに替く
 心林からうしと替くは免
 妻と具へておとすは免
 体と各々お屋とあしび
 おおちて夫婦をとおん
 娘とまゝと...
 のらおちて入るは免
 らまゝと...
 ちのせつ一年と...
 しがわき年のまは...



二柱内を...
 せも...
 娘おの...
 わ...
 せ...
 と...

源重之

風とつ...
 波...
 おの...
 果...



大中に能宣朝臣

法...
 法...
 ひ...
 物...



六月廿一日（一）
 麻子小のり びらりてあわし
 はかばかた 愛作して
 衣まじりておへ ねさる 縁後
 浮き 経てさきりまひか
 六月廿一日（一）
 十六日（二）
 ねとねとねとねとねとねと
 十七日（三）
 十七日（三）
 十七日（三）



藤原道信 朝長



八月廿一日（一）
 八月廿一日（一）
 八月廿一日（一）
 八月廿一日（一）
 八月廿一日（一）
 八月廿一日（一）
 八月廿一日（一）



右大将道徳母

夫のふくまのいそごうに
 座ふらふふちをほろけと
 ちとつひふふきや
 してりぬめ色のつらな海を
 さらすものかこころなる橋の
 樹ふうけく千より今もはみ
 けけ梅とて桜のさきり井
 二月のまゝくればみ葉汁
 なる女村へまゐりてきたり
 いのそのひーちとゆいそ
 のろくそそ葉こちりし仲
 とそぎこめひとがしきと
 ありとあふそを夜こまのる
 ふか人のるそ一丈ふ尺の愛
 茶屋と鐵よりりはふいそ

儀用言
 早す終る
 りと来
 まであ
 うとをれ
 ちとを
 くのりの
 いのらとものつ
 ね




鐵女のなをさつづくも有ん
 一俵ふせをら一丈ふ尺のる
 ちとつひふふきや
 おさめはわかあふまき鐵女
 へらまら消らせりけ行
 粧今あつてくわねのまん
 かくれ粧なる押げんそと

大納言公任
 瀧乃言は
 あて久
 なり
 名
 ながく
 ねとらえんを



極楽浄土の鞍相宝地台
 破樓閣と秘の七宝樹林園
 元筆枝葉五ふかき
 莊嚴細密なるをらうに付ふ
 兼統せしん人の西島
 あらうらうらと約て老なほ
 かへ句く君う我ひにとよ
 ひくり先の織女はつらつら
 根士親言かりとまてを心
 おおんこひふ西島
 油花なるゆふ今より十二年
 のら心我あかふひひせ
 知あやしくとをなとらう
 へはあふたふらげあまひ
 こよほらふみふらうらうら



のあふあつううははら
 少後とふねはのほ小
 こまのひらくはんは園か
 めらばあふひのまらうら
 久あふまむの位相接
 山とく注押は女たを後
 雲のひらくはんは園か

和泉 式部
 あらうらうら
 の世を
 かみの
 さいせり
 へうとくは
 色とま
 ぐれ

和泉 式部
 あらうらうら
 の世を
 かみの
 さいせり
 へうとくは
 色とま
 ぐれ



わがオチシカウとしてせの世を
 のまほの徳林へ入らう
 二百十や十四年の年月
 と後うつゝいひけり世の徳
 花のつひに今より十まりこと
 世のまはひはと世へんこと
 一かきでよそのまへにわらう

か〜うき〜としてつての世を
 家なき竹ふかおろし入
 くはめんととねしうら
 景う〜〜いり法人はあ
 やまひは原を〜人へ
 をあ〜をわも〜はあ長
 振る柳〜ひか〜
 三人〜のま〜めい
 注如たの後岸より番中
 二陸あ〜あのみんを
 と〜〜〜〜月日はあ
 ち〜〜〜〜社〜
 宝糸七甲乙卯の〜けい
 たは九月〜はあたは
 岸の〜〜〜〜

いせのわがせけ
伊勢大楠
 いふ
 魚
 さつ
 むら
 八重橋
 白ひわらふ

と
小武
 内侍
 大江山
 みる
 あまこす
 あまの橋

一ふびのきぬを穿てしあはれ
 ありなりとけしはあはれ
 かみさのりまをうけかたは
 味安んをさるるさきさきい
 そらのら一向ふ初後をぬい
 まいしうけりく三月十二日の
 夜入る身と清も激まて
 あらうい惚れ合きしと
 性生の時別とけしはぬい
 十日午のこころい念し
 移りゆくてく性生のあはれと
 とげさふさるるはあはれ唐きと
 おかしきま常はかふまやう
 親ふさのふふいさきまの
 せしはあはれをの運揚とけて

清が細云
 ねとらあ
 うらみれ
 うらみれ
 けうふ
 よふ
 あさあ
 家いゆきし



まるのきぬの性生とよけ
 こまのけしはあはれとんは
 ねん生はあはれとんは
 ねん生はあはれとんは
 まりきぬをさるるさきさきい
 合しはあはれとんは
 つはあはれとんは
 性生けうさの物とあはれ

左京太史道雅
 七つであひ
 なま
 ばあ
 人ば
 子う
 系那



さまへ入寮しし一層室と宗
 重番と号せりとのり又後会
 際と云ふはひきよひに
 とも人ぞ堂月の借ま
 生半のころころとふと色乃
 年月と怪く宗永幸中
 妙慈院の巻巻実をりつ付
 傍くみくし寺不任おせ
 より傍院よなるとらふも半か
 つのまご 毎年はわたの山
 への迎接舎と執りつる者も
 遊佐とつらふこまなる
 是の女の子のあはれを
 とつていふも成程とあはれ
 きやんとおわり中納言代記と
 してやふふりよるなりと

相換
 恨み
 神よ
 あふ
 あひり
 くらまん
 くれ

権中納言頼
 胡弓
 河勢
 せ
 あり
 せ
 津
 津本

書初の詩歌

赤辰今月秋極
 万歳千秋未央
 君みけり
 不老門前日月逢
 長生殿裏香秋富
 梧桐乃し
 月日の
 かしらうけま

前大徳公約

山橋
 花
 志
 あり人
 あり



池凍東頭風度解
 意梅北面香封室
 かしらふま

柳垂気力條先動
 池有波文水空
 かしらふま

周防内侍

春代
 花
 あり





世のなまあてのこころをせうせいの
 善山有雷信和性
 天々信う人
 外のお合と
 ありら久し
 ままうのまの
 さこそを ぶつまつまの
 氣無用 振新柳發
 水消岐 洗意若飯
 谷うそとく
 こころのい
 うらいつかや
 られけつとふ

結周法師
 嵐や
 こころの
 山此
 まら
 五田の
 けふの
 けふの

三條院
 おろ
 あで
 う記
 世に
 まら
 うの
 けふの
 けふの

七夕の詩歌

乞ひえりしをんなくきんを
 乞得少年本乞巧
 竹竿頭上秋線多

あまの川をわさ

こころふあはれも

きみうゆまゆら

とふとま

銀漢青波水も終

二星玉殿契ふは

たうこ乃とわら

ふねのわられ

いふあはれけつ

あ乃とまら

天川あはれの
 せりきりけり
 せりきりけり
 かこれり

今宵織女渡天河
 織月徹空一水輝

あまの川をわさ

あまの川をわさ

あまの川をわさ

あまの川をわさ

良運法師

まじり糸

まじり糸

まじり糸

まじり糸

林のゆき

林のゆき

大綱言経信

ゆき

門田の

あまの川をわさ

あまの川をわさ

あまの川をわさ

あまの川をわさ



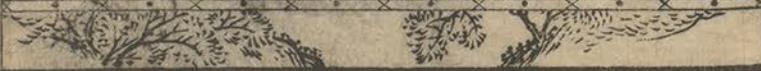
○月 夢つくし
天川つせさあか...
うくく...
それならん...
くれゆく...
七夕乃...
あわ...
つ...
あ...
よ...
...
な...
あ...



神子肉親
孝ふさ
...
あ...
か...
神乃...
し...



お中納言なごんまきは房
をう...
...
あ...





在のゆゑ
 極のつらき
 去れり
 在原業平朝臣

伊勢
 之悔のふ
 いづまら
 くらめ人も
 ありへ

九河内恒
 いづまら
 ひりり
 まさき
 心をきく



死友剛
 心をきく
 なまき
 心をきく

素性法師
 心をきく
 心をきく

心をきく
 心をきく



藤原基俊
 契おこ
 心をきく
 心をきく
 心をきく
 心をきく



源俊頼朝臣
 心をきく
 心をきく
 心をきく
 心をきく







土生八尾
平兼盛
平兼盛
平兼盛
平兼盛
平兼盛
平兼盛
平兼盛
平兼盛
平兼盛



中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務



中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務



中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務



中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務



中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務
中務

道周法師

思ひ入

いのち

背志

此と

夏り

あしぬ

涙なまきり



皇太后

後成

在中

な

な

おひ入

山

座り



女備れかこ



源の忠物語



女備れかこ

婦人の徳はとちがたに
昔とて為侍りてくまのぬ
やんぐくく糸相のあし
まうたのあまらうは
くくくそのまはくく又
あぶたたらんか
なごねありはるま
すくく月か
くくく
○胎のすんか
のうられ中がうら
か
わら乳のねおあ
ふくく

藤原清南

たぐく

志の

志の

み

い



俊忠

お

お

あ

あ

あ

あ

あ

あ



おののおめづれぞうりちかき
よあのおの指をよと指
れ指をかえまますくおあま
あまづへへ入りも指の
ひつゝいふるゝまひつゝ
けゆふゝま居まてまて
やうふゝつゝあゝまふづゝ
○指をかやうまゝらにお
おふゝのゝゝあゝお
右のまおた右の指をよと
ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝおゝおゝおゝおゝお
○指をかよとあゝあゝあ
らゝあゝあゝあゝあゝあ

西行法師
歌言をく
月やと
もの
ねは
とろ
ふらら
うらら
我を
うら



つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おちゝゝゝゝゝゝ
○けいんゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けふひてゝゝゝゝゝゝゝゝ

寂蓮法師
ひん
撫の葉
霧くら
あまは
あまは





もはま 来とて 栞のきと ぬい
 へ 柳子 及とて ちんちん ぐんぐん
 ○ 柳子の ちんちん ぐんぐん
 ちんちん ぐんぐん ちんちん ぐんぐん
 ちんちん ぐんぐん ちんちん ぐんぐん
 ○ 小神 ちんちん ぐんぐん ちんちん ぐんぐん

けり ありふらとて なそ 柳の
 ちんちん ぐんぐん ちんちん ぐんぐん
 けり ありふらとて なそ 柳の
 ちんちん ぐんぐん ちんちん ぐんぐん
 ○ 柳子 ちんちん ぐんぐん ちんちん ぐんぐん
 ちんちん ぐんぐん ちんちん ぐんぐん
 ○ 柳子 ちんちん ぐんぐん ちんちん ぐんぐん
 ちんちん ぐんぐん ちんちん ぐんぐん
 ○ 柳子 ちんちん ぐんぐん ちんちん ぐんぐん
 ちんちん ぐんぐん ちんちん ぐんぐん

武子肉親王
 むら 結よ
 たね
 ちんちん ぐんぐん
 ちんちん ぐんぐん
 ちんちん ぐんぐん

皇女御
 柳波江乃
 一重ゆゑ
 ちんちん ぐんぐん
 ちんちん ぐんぐん
 ちんちん ぐんぐん

Handwritten text in the top right section, likely a list of names or titles in a specific script.



哉物の仕やう

後京極攝政 藤原長俊

養喟や

おね木の

小巻

お海老

片お

独りも孫孫

殿留門院大輝

みまごやを

なま

あまの

神ぞ

わさ

わわ

あま

ら

物 かんじ
物 かんじ
物 かんじ
物 かんじ
物 かんじ
物 かんじ

物 かんじ
物 かんじ
物 かんじ
物 かんじ
物 かんじ
物 かんじ

九寸ぐわのぐししかたねじ
かひけ尺守位とすべし
あつとくふあつと足金

。中並のいさ
あつとびのあつとくふあつと

かんじ
かんじ
かんじ
かんじ
かんじ
かんじ

物 かんじ
物 かんじ
物 かんじ
物 かんじ
物 かんじ
物 かんじ

泰儀雅經

之芳野の

山花林

うまふ

ありあし

むらさ

あつと

あつと



前大僧正慈圓

れはあな

あつと

あつと

あつと

あつと



入道前を改めた
 花よりあふ
 庭あふ
 書あふ
 ぬりあふ
 わりあふ
 なりあふ

入道前を改めた
 花よりあふ
 庭あふ
 書あふ
 ぬりあふ
 わりあふ
 なりあふ



権中納言定家
 大ぬ人と

権中納言定家
 大ぬ人と



ろびりくすのこひり
 めんまのすりあすし
 〇んどのあまめ
 ろびりくすのこひり
 なびりくすのこひり
 めんまのすりあすし
 〇んどのあまめ
 酒こんぶ
 日つきのめ
 口たの入 男女のまじり
 世はほろびかたのまじり
 とつりやまのまじり
 ろんかすすすすすすす
 草すすすすすすすす
 けしりくすのこひり
 つるのけしりくす

正三位家隆
 風うらや
 小門乃
 美
 今ど地
 夏
 志系一あ
 斗る



百十四

木姓 麻房 邦 満
 梅武 色 芳 兼
 栄貞 留 乃 林 良
 松 幼 吉 蜀 久
 大性 花 吉 蜀 久
 岩 虎 彦 國 中 彦
 高 教 彦 彦 彦 彦
 高 教 彦 彦 彦 彦
 源 極 彦 彦 彦 彦
 性 重 彦 彦 彦 彦
 高 傳 彦 彦 彦 彦
 流 宗 彦 彦 彦 彦

後鳥羽院
 人
 あら
 相
 急





1001727179

○らんちう日
 正月の七日七月の十日
 二月の八日八月の十日
 三月の九日九月の十日
 四月の十日十月の十日
 五月の十一日十一月の十日
 六月の十二日十二月の十日
 七日の十三日七月の十日

○らんちう日
 八月の十日八月の十日
 九月の十日九月の十日
 十月の十日十月の十日
 十一月の十日十一月の十日
 十二月の十日十二月の十日

皇 都

池田東籬亭主人輯并書

西川龍章堂助筆

森川保之畫

井上治兵衛刻
 祖谷丸門

天保六年甲午春發兌

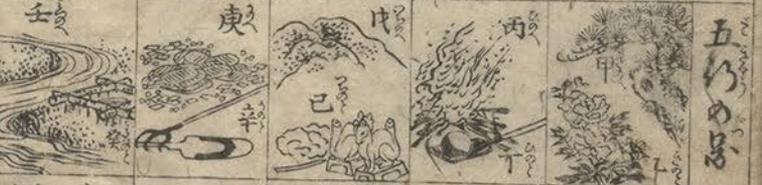
系三條通柳亭角

吉林 吉野屋仁兵衛板

○知死期りやう

上日 一二十九日九十六日
 二日 三十四日八十八日
 三日 三十九日八十八日
 四日 四十四日九十六日
 五日 四十九日九十六日
 六日 五十四日九十六日
 七日 五十九日九十六日
 八日 六十四日九十六日
 九日 六十九日九十六日
 十日 七十四日九十六日
 十一日 七十九日九十六日
 十二日 八十四日九十六日
 十三日 八十九日九十六日
 十四日 九十四日九十六日
 十五日 九十九日九十六日
 十六日 一百零四日九十六日
 十七日 一百零九日九十六日
 十八日 一百一十四日九十六日
 十九日 一百一十九日九十六日
 二十日 一百二十四日九十六日
 二十一日 一百二十九日九十六日
 二十二日 一百三十四日九十六日
 二十三日 一百三十九日九十六日
 二十四日 一百四十四日九十六日
 二十五日 一百四十九日九十六日
 二十六日 一百五十四日九十六日
 二十七日 一百五十九日九十六日
 二十八日 一百六十四日九十六日
 二十九日 一百六十九日九十六日
 三十日 一百七十四日九十六日

○不來蛇月



壬	庚	戊	丙	甲
性水	性金	性土	性火	性木
十月	二月	八月	四月	八月
壬寅卯辰巳	庚辰巳午未申酉戌亥子	戊辰巳午未申酉戌亥子	丙辰巳午未申酉戌亥子	甲辰巳午未申酉戌亥子
天保六年	天保六年	天保六年	天保六年	天保六年

有記 壬寅卯辰巳

○ 無死期りの中

上十日 一二十九日九六六
 三十四日八八八
 六七八日七七七
 中十日 一二十九日八八八
 三十四日七七七
 六七八日九九九
 下十日 一二十九日七七七
 三十四日九九九
 六七八日八八八

○ 不來蛇月

正月 三日 土日 十九日 廿七日
 二月 二日 十日 十八日 廿六日
 三月 一日 九日 十七日 廿五日
 四月 四日 十二日 廿日 廿八日
 五月 五日 十三日 廿一日 廿九日
 六月 六日 十四日 廿二日 三十日

五行の象



有氣 卒氣の事

性木	性火	性土	性金	性水
八月 酉戌亥子丑寅卯	十一月 子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥	五月 午未申酉戌亥	二月 卯辰巳午未申酉戌亥	六月 未申酉戌亥
巳午未申酉戌亥	子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥	卯辰巳午未申酉戌亥	辰巳午未申酉戌亥	午未申酉戌亥
巳午未申酉戌亥	子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥	卯辰巳午未申酉戌亥	辰巳午未申酉戌亥	午未申酉戌亥

○ らんらんり日

正月 初七日 七月 初七日
 二月 初八日 八月 初八日
 三月 初九日 九月 初九日
 四月 初十日 十月 初十日
 五月 初十一日 十一月 初十一日
 六月 初十二日 十二月 初十二日
 七日 初十三日 正月 初十三日
 八日 初十四日 二月 初十四日
 九日 初十五日 三月 初十五日
 十日 初十六日 四月 初十六日
 十一日 初十七日 五月 初十七日
 十二日 初十八日 六月 初十八日
 十三日 初十九日 七月 初十九日
 十四日 初二十日 八月 初二十日
 十五日 初二十一日 九月 初二十一日
 十六日 初二日 十月 初二日
 十七日 初三日 十一月 初三日
 十八日 初四日 十二月 初四日
 十九日 初五日 正月 初五日
 二十日 初六日 二月 初六日
 二十一日 初七日 三月 初七日
 二十二日 初八日 四月 初八日
 二十三日 初九日 五月 初九日
 二十四日 初十日 六月 初十日
 二十五日 初十一日 七月 初十一日
 二十六日 初十二日 八月 初十二日
 二十七日 初十三日 九月 初十三日
 二十八日 初十四日 十月 初十四日
 二十九日 初十五日 十一月 初十五日
 三十日 初十六日 十二月 初十六日

皇

池田東籬其主人輯并書

西川龍章堂助筆

森川保之畫

都

井上治兵衛 刻
 禊谷江丸 門

天保六年甲午春發兌

系三條通御幸所角

書林

吉野屋仁兵衛板

